

## 地獄堕ちの能力 : 『事件の核心』考察(下)

著者	玉井 久之
雑誌名	研究論集
巻	92
ページ	21-34
発行年	2010-09
URL	<a href="http://doi.org/10.18956/00006143">http://doi.org/10.18956/00006143</a>

## 地獄堕ちの能力

——『事件の核心』考察(下)——

玉井久之

### 要旨

スコビーは「あわれみ」と「責任感」がきわめて強く、過去の「誓い」が現在のスコビーに重くのしかかっている。受け身の生き方もこのためである。さらに過去に苦しむ様子は、ほとんどスコビーの過去について語られないという語りが示している。スコビーの「あわれみ」は相手を見下ろし、相手の人生をどうにかできるというエゴイズムを持っていた。しかしスコビーは自らのエゴイズムに気がつくことがなかったため、誤解と判断ミスにつながった。スコビーの「責任感」「あわれみ」、それにエゴイズムと誤解や判断ミスというパターンは、少女の死の場面を経てヘレンと神との関係に引き継がれ、その深刻さを深めている。同時にエゴイズムも大きくなり、誤解や判断ミスは深刻さを増す。そしてスコビーの「あわれみ」と「責任感」における愛とエゴイズムは、ルイズとヘレンと神のための自殺において、それぞれの頂点に達している。

キーワード：グリーン、『事件の核心』、カトリック作家

### Ⅵ スコビーの宗教観の変化

スコビーの宗教観はヘレンとの情事の前後で大きく変わっているが、彼の基本的な宗教観はバンバでのベンバートの自殺とベンデでの少女の死を経て形成されている。スコビーのもともとのカトリックに対する想いは、「壊れたロザリオ」(10)が象徴するように、決して熱いものではない。ルイズによると、スコビーがカトリックに改宗したのもルイズと結婚するためである。こうしたスコビーがベンバートの自殺を処理するためにバンバに赴いたとき、彼の宗教観とカトリック教会の教義との整合性が問題になる。地元のクレー神父にとって自殺があまりにも恐ろしい神に対する裏切り行為なので、クレー神父は「殺人の希望はありませんか？」(94)という奇妙な問いかけをスコビーにし、この神父は現実を直視できない一種の臆病さを露呈している。さらに神父は、自殺が「教会の教えによると…」(98)と弱々しく「許しがたい」(98)行為であるとはのめかすことにより、教会の教えにしか判断の根拠を求め

られない様子を示している。スコビーは、彼自身やクレー神父のように自殺が大罪だと知っている者ならともかく、ベンバートンのような未成熟で無知な者、しかもカトリック教徒でもない者にこそ神の慈悲があるはずだと反論している。この発言はスコビーの神の慈悲深さに対する信頼を示すとともに、彼のなかで「許される者」と「許されざる者」の境界を明らかにしたと言える。スコビーはこの直後に彼自身とルイズが自殺をしようとする夢を見る。その夢のなかで、スコビーにはカトリックである以上自殺が「絶対にできない罪」(104)で「どんな大義名分も正当化できない」(104)罪だと確認される。しかしルイズは南アフリカに行けないことを苦に自殺をしまい、クレー神父の「教会の教えによると…」(98)という声が徹かに響く。この夢をみたあとバンバから戻ったスコビーは、ルイズの渡航費用としてユーゼフから金を借りる決心をしている。このような決心をする過程において、無知な者に対する神の「慈悲」を教義の枠を超えたところにまで期待する一方で、教会の教えを否定しきれず、「自らを永遠に地獄に墮とす」(104)罪としての自殺に対する恐怖が、スコビーに心理的な影響を与えていることがわかる。一方でスコビーの神の「慈悲」に対する期待は、ペンデで少女の死に立ち会ったときに打ち砕かれている。両親に死なれ、さらに覆いのないポートのなかで40日間も生きながらえた少女の事実は、スコビーにとっては神の愛と結びつきたく、「神秘」(135)でしかない。スコビーは少女の死のあと「あなたはどのように彼女を溺死させなかったのです」(142)と独り言を言っているが、スコビーにとって、「自らの創造物を愛するほどの人間性を持たない神を信じるのがでなかった」(135)のである。このように、スコビーの宗教観は、神の無限の「慈悲」に対する「期待」と、現実の悲惨さに介入しない神に対する「不信」という基本的な性格を持つ。

このようなスコビーの神の「慈悲」に対する「期待」と「不信」は、神と他人との関係において考察されており、スコビー自身と神との関係はスコビーには十分には認識できていない。スコビーにとって神は近づきやすく、スコビーは「神は自分に従うもっとも卑しい者に対しても身をさらしている」(177)考えている。しかしスコビーは自分は許してもらうべき重大な罪を犯していないと考えており、したがって彼には祈りの言葉も「一つの形式」(176)で「呪文」(176)としか思えない。スコビーの場合、自分に罪がないことを「美德」(129)と考えるような思い上がりは見られないが、「あわれみ」と「責任感」の功罪について十分に考察することがないから、スコビーはそれらが内包するエゴイズムに気が付くことがない。したがって自らを「軍隊の一兵隊、軍の重大な規律を破る機会もないような未熟な軍隊の一員」(129)、あるいは「傍観者の一人——キリストのまなざしが見方や敵の顔を探して通り過ぎたに違いない十字架の周囲に集まった人たちの一人」(175)と考えているのである。

スコビーとヘレンの情事は、彼女に対する「責任」とともにスコビー自身の「罪」を引き受けることを意味する。罪を犯すことにより、皮肉にもスコビーと神との距離は近くなっ

ている。ヘレンは「二人がこうなり始めた頃は、そんなに神様のことはおっしゃらなかったわね」(246)と言っているが、これはスコビーが不倫という「罪」を背負いこんで、彼自身の魂の救済が問題になってきたことを表している。自らの魂の救済を第一に教える教会の教えに従って、告解をしてヘレンと別れようと思うが、ヘレンの顔を見ると、「あわれみ」のためにその気持ちが失せてしまう。他人に対する神の「慈悲」を信用しきれないスコビーにとって、ヘレンと別れることは、彼女を女たらしで無責任なバグスターにあずけてしまうことであり、神の「慈悲」にゆだねることではない。スコビーは「神の創造物の一人を犠牲にしてどうして神を愛することができるだろう。母親は子供がそのために犠牲にならなければならないような愛を受け入れるだろうか」(217)と自らを正当化し、自分に対しては「神は待ってくれる」(217)と神の「慈悲」に対する期待を示している。自らの魂の救済が先か、ヘレンの保護が先かという矛盾した「責任」に苦しむスコビーは、ヘレンの可能性を持った一人の大人と見られないため、二者択一の問題としか考えられない。

しかしながら突然ルイズは帰国し、ルイズとヘレンとの間で板挟みの状態にあるスコビーの苦悩は自殺願望へと発展する。実はルイズはスコビーとヘレンのうわさを聞きつけてあわてて帰ってきたのだが、スコビーにはルイズの帰国の本当の理由は分からない。ルイズからの電報を受け取ったスコビーは次のように考えている。

なぜおれなのだ、と彼は思った。なぜ彼女たちはおれを必要とするんだ、昇進しそこなった鈍感な中年の警察官のおれを？おれは他の場所で彼女たちが得られないものを与えられるわけではない。どうして彼女たちはおれを心の平安のうちにほうっておけないんだろう。他の場所ではもっと若くてもっと上等の愛と、もっと大きな安全があるのに。ときどき、彼には、彼が彼女たちに分け与えることのできるものは彼の絶望だけだ、と思われた。(219)

自らの「あわれみ」と「責任感」が招いたこの事態を、「彼女たちが彼を必要とした」ためと考えるとところにスコビーの思い違いがある。また以前から「死者は必要とされない、忘れさられる」と考えていたスコビーは、自分が「絶望」しか与えることができないのならば、これ以上彼女たちが自分を頼ることのないようにと、自殺を意識し始めている。パンパでベンバートンの自殺を処理した後、夢のなかで確認したように、自殺はスコビーにとって「どんな大義名分も正当化できない」(104)行為である。そこでスコビーは、ベンバートンとは違って知識のあるカトリック教徒の自殺についても救済の可能性を探っている。自殺を肯定するために、スコビーは二つの根拠を考え出す。

神父たちは自殺は許されぬ罪で、悔い改めをしようとしないう絶望の最後の表現だと教える。そしてもちろん人はその教会の教えを受け入れていた。ところが神父たちは神が自らの法則を破ったことがあるとも教える。すると神が墓の石の下でよみがえったことよりも、自殺者の暗黒のなかに許しの手を差し伸べることのほうが、まだ可能性があるのではないか？キリストは殺されたのではない——神を殺すことなどできない。キリストは自殺したのだ。十字架上で首をくくったのだ、ペンバートンが絵の掛け具で首をくくったのと同じくらい確かなことだ。(220)

イエスの十字架上の死が自殺であったなら、信じがたいイエスの復活よりも、神が自殺者を許すほうが可能性があるという論理である。もう一つの根拠に関しては、スコビーはヘレンに次のように語っている。

それに教会の教えに反していても、人は、愛は——どんな種類の愛であれ——神の慈悲を受けるに値するという確信を持っているんだ。もちろん、人はその償いをしなければならぬだろう。恐ろしいほどの償いをだ。だがおれはその償いが永久に続くとは思わない。たぶん死ぬ前に時間が与えられるだろう…。(245-246)

自殺をしようと考えているスコビーには、救いをもはやカトリック教会のなかに見出すすべはなく、「キリストも自殺した」という苦しい言い訳と、「愛」に希望を見出そうとしている。そしてそれらの根底にあるものは、神の「慈悲」に対する期待である。

南アフリカから帰宅したルイズは、さっそくスコビーを聖体拝領に誘う。スコビーとヘレンの関係を知らされているルイズは、聖体拝領を通して浮気が進行中かどうかを試そうとしているのである。スコビーにとってみれば、ヘレンとルイズに対して「責任」を負うだけでなく、神に対しても「責任」を負うことになったと言えよう。ルイズのたくらみを知らないスコビーは、ルイズから聖体拝領に誘われているという宗教的苦悩をヘレンに語っている。宗教的センスのないヘレンは「たったそれだけ？」(245)と言い、聖体拝領の重みやスコビーの宗教的苦悩を全く理解できない。この場面でスコビーは、ヘレンとルイズへの愛を自分の魂の救済よりも上に置いていることと、偽りの告解はそれ以上の悪であると言っている。つまり教会の教えにのっとって考えているスコビーには、自分の魂の救済を二の次に考えることも罪だが、偽りの告解をして聖体拝領を受けることは、この上ない冒涇だということである。翌朝、スコビーは仮病を使って聖体拝領を逃れるが、この方法をいつまでも続けられるはずはない。スコビーには告解をしてヘレンと別れるか、神を裏切るかの選択しかない。スコビーはランク神父のところに行き、告解室に入る前に次のように祈っている。

彼は奇跡を祈った。「おお、神よ、私に確信を与えてください、私を助けてください、私に確信を与えてください。私があの子よりも重要なのだと感じさせてください」。祈っているとき彼に浮かんできたのは、ヘレンの顔ではなくて、彼をお父さんと呼んだ死ぬ間際の子供の顔であった。そして化粧台の上からじっと見つめている写真のなかの顔であり、水夫にレイプされ殺されて、黄色いろうそくの明かりの中でもはや見えない目で彼をにらんでいた12歳の黒人少女の顔だった。「私に自分自身の魂のことを何よりも先に考えさせてください。私が見捨てる者に対するあなたの慈悲を信じさせてください」(258-259)

ここでスコビーが祈る「奇跡」とは、彼が神の「慈悲」を信じられるということである。スコビーが祈っている「奇跡」の内容は、自分自身に関する祈りから始まるが、ヘレンにとどまらず痛ましい最期を遂げた子供に対する思いに変化している。これはスコビーの「あわれみ」と「責任感」がエゴイズムを内包しながらも、不幸な子供すべてに対して心を痛み、「責任」を引き受けようとする大きな父性的な「愛」をも含んでいることの証である。しかしながらスコビーは、彼が「見捨てる」と感じている不幸な子供たちへの神の「慈悲」を確信できない。告解室では、ランク神父は教会の教えの通り、「その女に会わないように」「悔い改めが必要だ」という答え——スコビーが告解室に入る前から分かっている「正しい答え」(257)——しか返せない。生きている人に役に立ってないことが悩みの種であるランク神父には、告解者がスコビーで、相手の女性がヘレンであることはおそらく分かっているが、教会の教えを踏み出す勇気はない。スコビーはランク神父に本心を語れずに、悔い改めを拒否して帰っていく。自分自身と神に対しては正直でいようと考えたからである。いったん悔い改めをしてその場を逃れるという告解のシステムの抜け穴をつく方法も考えられる。しかしスコビーの悔い改めの拒否は、ルイズのために神を裏切ろうという選択であり、自分自身の救済に関しては、教会が保証する救いを拒否し、覚悟の上で地獄堕ちをするという意思表示である。次の日、再びルイズから聖体拝領に誘われたスコビーは教会に行き、「この際、永遠に続くどんな犠牲を払ってでも、ルイズの目に自らの潔白を証明し、彼女が必要とする安心を与えてやろう」(261)と決心し、神には「この女たちを第一に、あなたを第二にすることを認めてください」(262)と言い、聖体拝領を受ける。

## Ⅶ スコビーの自殺の問題点

スコビーの計画とは、病死を装って自殺をすることである。狭心症を装い、不眠を訴えて睡眠薬を処方してもらい、ためておいた睡眠薬を一気に飲むというものだ。スコビーが具体

的な行動をとる直接の引き金は、アリの死に対する責任感だ。スコビーは、彼がヘレンにキスをする場面をアリに目撃され、さらにアリの異父兄弟がウィルソンの給仕であることからアリに対する疑いを抱く。スコビーがユーゼフにアリに対する不信を伝えたところ、ユーゼフは手下にアリを殺害させる。スコビーは知らなかったとは言え、その計画に間接的に加担したことになる。アリの死体を見たとき、スコビーは奇妙にもアリと神とを重ね合わせている。

おお、神よ、と彼は思った。私はあなたを殺してしまいました。長年私に仕えてくれたのに、その挙句の果てに私はあなたを殺したのです。神はガソリン罐の下に横たわっていた。そしてスコビーは口のなかに涙を、唇の裂け目に塩辛さを感じた。あなたは私に仕えてくれたのに、私はあなたにこんなことをしてしまいました。あなたは私に忠実であったのに、私はあなたを信用しようとしなかったのです。…「おれはこの男を愛していたのだ」とスコビーは言った。(291)

スコビーの念頭にはずっと聖体拝領の件（スコビーはアリが殺害された日にも聖体拝領に行っている）があって、それがアリの死と結びついてこのようなイメージになったのであろう。そしてアリと神とを重ね合わせることにより、スコビーは初めて彼と神とのこれまでの関係に気付いている。アリと神とのアナロジーが物語るものは、「愛しているのに信用しなかった、そしてその結果殺してしまった」ということである。アリはスコビーに15年間仕え、スコビーが「責任感」と「あわれみ」を感じなくて済み、一緒にいて「平安」を感じることができた唯一の相手であった。しかしスコビーがアリに対して抱いた不信感のために、アリは殺害されたのである。そしてスコビーはアリが殺されて初めて、自分がアリを愛していた事実が気付く。一方でスコビーにとって神は「自分に従うもっとも卑しい者に対しても身をさらしている」(177) 存在で、2000年間にわたり人類に仕えてきた存在である。しかしどうしても神の「慈悲」を信じ切れず、スコビーは大罪を犯したまま聖体拝領を受けてしまった。スコビーは神を冒瀆した聖体拝領のときに「おれは十字架だ」(264) と考えており、神を冒瀆することで「神を殺した」と拡大解釈している。このようにスコビーはアリと神の殺害に対して痛烈な責任を感じ、自殺を急ぐことになる。

スコビーは、ヘレンと神とルイズのいずれに対しても、彼独自の理屈から自殺の動機を導き出している。ヘレンはスコビーがアリの殺害にかかわったと勘違いし、茫然自失の状態であっばいメロドラマのような別れを持ち出す。ヘレンは、自分たちの関係が殺人にまで発展したと思って、もはや耐えられないのだ。するとスコビーは神に自分の死を願いだし、次のように考える。

もしおれが死んだら彼女はおれから解放されるだろうと彼は再び思った。人は死者はすぐに忘れ去られてしまう。人は死んだ人のことで考えたりしないものだ——今何をしているのだろうか、誰と一緒にいるのだろうか、こうしたことが彼女にとってつらいんだ。

(296)

他人に苦痛を与えたくないスコビーは、自分が死ぬことが「責任」だと考えている。しかしスコビーは大きな誤解をしている。死者がそう簡単に忘れ去られるものではないことは、彼自身がキャサリンの死を通して気が付いているはずである。さらに2000年前に死んだキリストに対して、非常に責任を感じているのはスコビー自身である。またスコビーはヘレンの苦しみを誤解している。これではまるでヘレンが嫉妬に苦しんでいるかのようである。「他人を苦しめたくない、自分が死ねば解放されるだろう」という考えは理解できるが、「苦しみ」の内容と何から「解放される」のかについての認識に誤解がある。

またルイズと神に対する理由付けにおいて、スコビーのエゴイズムは頂点に達している。この時期、皮肉にもスコビーは警察署長に内定しており、ルイズは彼女好みの成功を手に入れようとしている。楽しそうにクリスマスの計画を立てるルイズに対し、スコビーは「さらに自分を地獄に付き堕とす計画をたてている」(299-300)と感じ、憎しみを感しながら次のように考えている。

彼は思った、おれが愛したのは、世間の人々が背後で自分を笑っていると感じてヒステリックになっている女だ。おれは失敗者を愛する、成功者を愛することはできない。そして、救われた者の一人として今そこに座っている彼女は、何んと成功した人間の表情をしていることか。…自分がしてきたことと、これからしようとしていることを考えて彼は思った、神でさえ失敗者だ。…おまえをもう一度あわれませてくれ、がっかり落ち込んで魅力のない女になってくれ、失敗者になってくれ、二人の間のこの苦い隙間がなくなってもう一度おまえを愛せるように。(299)

ここで「醜さ」に対する「あわれみ」は、「失敗者」に対する「あわれみ」へと姿を変えている。スコビーがルイズのために自殺をする理由は、自分が自殺をして警察署長にならないことにより、ルイズを「失敗者」にするためである。「失敗者」だからあわれむのではなく、あわれむために「失敗者」にするというスコビーの「あわれみ」は、本末転倒した形にゆがめられている。またキリストに対しても、自分が神を愛するのは、「神でさえ失敗者だ」(299)と考えるからだ。今やスコビーにとっては神さえも「あわれみ」の対象である。睡眠薬を処方された後、スコビーは教会で神に向かって次のように考えている。



私はヘレンや妻に苦しみを与えるよりは、あなたに苦しみを与えることを選びました。なぜなら私にはあなたの苦しみは見えないのですから。私は想像することができるだけです。でも私があるあなたに対して——彼女たちに対しても、できることには限界があります。私が生きている限り、私には彼女たちのどちらも捨てることはできません。でも私が死んで彼女たちの血から私を遠ざけることはできます。彼女たちは私のために病んでいて、そして私は彼女たちを治してやれます。そしてあなたもです。神よ——あなたも私のために病んでいます。…毎月毎月あなたを汚し続けることはできません。この際私を失ってしまわれる方があなたのためです。(304)

この理屈も「これ以上苦しみを与えられないから自殺をする」と言うことである。しかしスコビーは神を卑小化し、自分が神よりも上の立場に立とうとしていることに気が付いていない。スコビーのこの独白に対し、スコビー内部の声——スコビーは神の声と意識している——は自殺を止めようとして、「おまえが今なすべきことは、ベルを鳴らして告解室に入り、告解をするだけだ」(305)と言う。そして「家に帰って妻にさよならを言い、愛人と一緒に暮らしたらい。…彼女たちのどちらかは苦しむかもしれないが、苦しみが大きくなるようにするから私を信用できないか」(305)、そして「今まで通りやっていけないのか」(306)と言い、スコビーの生存のために条件を下げて行く。しかしスコビーは断固「あなたを信用しない」(305)と言って、内なる声の要求を拒否する。この内なる声はスコビーの意識が作り出したもので、スコビーの生存のためにどんどんとハードルを下げる神は、語り手により言い値を下げ続ける「市場の商人」(306)にたとえられている。スコビーは神を「近づきやすい」と思う反面、「あわれみ」により神を「市場の商人」(306)に、ヘレンやルイズと同じ人間にまで引き下げてしまっている。この直後にためておいた睡眠薬を一気に飲むが、悔い改めの祈りを型通りにささげる時間もなく意識を失ってしまう。

## Ⅶ スコビーの聖性

スコビーは悔い改めをしないまま聖体を拝領し、自殺を試み、悔い改めの祈りも言い終わらないうちに意識を失ってしまった。かすかに神の「慈悲」に対する期待を保ちながらも、スコビーは一応カトリックの教義の上立っているため、カトリック最大の罪を犯した重みを感じ、地獄墮ちを信じている。したがってスコビーは、カトリック教会の救済の枠組みからは完全に漏れてしまう人物である。一方で作者がそのようなスコビーをどのように評価するのかということと、神の「慈悲」をどう考えるのかについてのヒントがスコビーの自殺の場

面に隠されている。グリーンはアランとのインタビューで次のような発言をしている。

神の正義は全面的な認識に由来する。だから私は地獄を信じないのだ。なぜならもし神が存在するなら——わたしには確かでないが——神は全知だからだ。もし神が全知なら、その神によって作られた被造物が永遠の劫罰に値するほど悪くなるとはどうしても考えられない。神の〈恩寵〉がどこかで介入するはずなのだ。<sup>4)</sup>

また別のインタビューにおいて、「彼らは罪を犯す、でも神の慈悲は無限である。そしてこれは重要なことなのだが、実際には告解しないことと、告解をした後で感じる自己満足との間には差があり、信心深い人はこれには気が付かないかもしれない<sup>17)</sup>」と言っている。上記の発言をまとめると、作者は神の無限の「慈悲」を信じていて、どこかの時点で神が介入し、それゆえ地獄堕ちはないということである。「カトリック社会におけるプロテスタント」<sup>18)</sup>を自負する作者にとっては、告解に関しても、告解をしないことよりも告解をしたことに対する「自己満足」の方が重い罪なのだ。つまり作者にとって、スコビーが告解をすませて「自己満足」を覚えるよりは、スコビーのように告解を拒否し続ける方が、神に対して愛を示したことになるのである。まして悔い改めの祈りが形通りに、最後までなされたかどうかは作者にとって重要ではない。語り手は、スコビーが意識を失いつつあるときに、「彼にはあたかも部屋の外にいる誰かが彼を探し、彼を呼んでいるように思えた」(313)と神の介入の示唆している。そしてスコビーが床に倒れたときに鳴る聖女のメダルの音は、スコビーの救済を暗示している。作者は、スコビーの意識とは全く違った次元で示される神の「慈悲」の大きさと深さを暗示しているのだ。

作者はさらに作品の最後で、スコビーの死がヘレン、ルイズ、そしてランク神父に与えた影響を通して、スコビーの聖性を暗示している。スコビーの死後、スコビーの日記の日付のトリックに気が付いたウィルソンにより、スコビーの死が病死ではなく、自殺であることが証明される。ヘレンは作品内においてスコビーの死が自殺によるものとは知らず、バグスターに言い寄られ、危うく身を持ち崩しそうになっている。しかしここでヘレンはスコビーがかつて彼女に語っていた言葉を思い出し、「死んだ人を愛することはできないでしょう？」(318)とバグスターに問いかけている。バグスターはヘレンの真剣な態度に怖気付き、帰っていく。ヘレンは短期間のうちに二度にわたり親しい男性に死なれた。しかしスコビーの死は、人は死んでも忘れ去られるものでないことと、死んだ人を愛し続けることができることをヘレンに教えている。バグスターが帰って一人になったヘレンは次のように考えている。

彼女はまぶたの奥の暗闇のなかで再び一人になった。信じたいという欲求が彼女の体のな

かで子供のようにうごめいた。彼女の唇が動いたが、彼女が言おうとして思いついた言葉は「永久に、永久に、アーメン…」だけだった。そのあとは忘れてしまっていた。彼女は自分のそばに片腕を差し出して、もう一つの枕に触れた。まるで千に一つでもおそらくは結局彼女が一人ではないというチャンスがあるかのように。そしてもし今一人でないなら、もう二度と一人にならないかのように。(318)

ヘレンの傍らにある「もう一つの枕」とはスコビーが生前に使っていた枕であろう。「信じたい」という欲求をスコビーの思い出が後押ししている。そして孤独だと感じていたヘレンは、孤独から脱する可能性を見出している。スコビーの死はヘレンをバグスターから救うだけでなく、彼女に生きる希望を与え、信仰回復のきっかけを与えたのだ。

一方でルイズは、スコビーの自殺が証明される前はウィルソンに次のように言っている。

「ずっと知っていたんですか——あの女の何を？」とウィルソンが尋ねた。

「だから帰ってきたの。カーター夫人が手紙をくれたの。みんなが噂しているって書いてたわ。もちろんあの人はばれてることに全然気が付かなかった。あの人は自分がとてもうまくやっていると信じていたわ。そして私も危うく信じ込むところだったわ——もう終わったんだと。あんなふうに聖体拝領に行ったりしてたから」

「それと良心の折り合いをどう付けてたんでしょうね」

「カトリックのなかにもそんな人がいるんだと思うわ。告解に行ってはやり直す人が。でも私はあの人はもう少し正直だと思っていたけど。人が死ぬといろいろ分かってくるものよ」

「ユーゼフから金をもらっていた」

「今ではそれも信じられるわ」(315)

ここでルイズはスコビーとヘレンとの関係をすでに知っており、聖体拝領をスコビーの浮気のリトマス試験紙として使っていたことが判明する。しかしスコビーが告解をしないまま聖体拝領を受けたことは知らない。ヘレンの理解は、スコビーが告解を済ませて聖体拝領を受けてはまたヘレンと罪を犯しているというものである。またユーゼフとの関係も（おそらくウィルソンに教えられて）知っている。問題は直後にウィルソンがスコビーの日記のトリックに気が付き、ヘレンは「そんなはずはないわ、そんなことをできる人ではなかったわ。結局いろいろあったけど、あの人はカトリックだったのだから」(316)と発言してからである。作品中で説明されることはないが、ルイズのスコビー像は一変したはずである。ルイズとウィルソンがたどり着きそうな結論は、スコビーがヘレンとの情事とユーゼフとの汚職の結

果、身動きが取れなくなって自殺をしたということであろう。彼らにとってスコビーは刑事的にも宗教的にも許しがたい「罪人」なのである。そして読者だけが「事件の核心」を知り、読者が知るスコビー像と彼らが想像するスコビー像の差は大変大きなアイロニーになり、ウィルソンとルイズの理解の浅さを際立たせている。

生きている人に役立てないことが悩みの種だったランク神父は、最後に自信を持って神の「慈悲」について語れる人になる。「あの人は良いカトリックではありませんでした」(319)と言うルイズに「それは一般によく使われる言葉のなかで最もおろかなものだ」(319)と言い返し、うらみがましいルイズが「教会が教えるには…」というクレ神父そっくりの発言をすると、「教会の教えはわしにも分かっている。教会はあらゆる規則について知っている。だが教会は、一人の人間の心のなかで何が起きているのかについては知らないのだ」(320)と言っている。作者はスコビーが意識を失う直前に神が介入したことを暗示していたが、ランク神父の発言はこの暗示を補強し、神の「慈悲」の無限さを強調する効果を持つ。ランク神父の存在意義はそれだけではない。デヴィタスは、ランク神父はカトリック教会の規範が柔軟に対応できることを示すために用いられていると指摘している。<sup>19)</sup>もしもランク神父がクレ神父と同じように自殺が許されない行為だと言っていたなら、ランク神父は単なる臆病者で終わり、この作品はカトリック教会批判の色彩を一層深めていただろう。作者にとってランク神父の成長は、神の「慈悲」を強調する一方でカトリック教会の権威保持にとっても必要であったのだ。続けてランク神父は「わしの考えでは、あの人は本当に神を愛していたと思う」(320)と発言するが、ルイズは「あの人が他に誰も愛していないのは確かなことです」(320)と言う。その発言に対しランク神父は「その点でもあなたは正しいでしょうな」(320)と言い、今度はルイズの発言を否定しない。スコビーについての理解には物語の構成上限りがあるが、ランク神父はこの物語で唯一スコビーを理解できる人物である。ゴシップ好きの神父だから、スコビーとヘレンの関係も知っているに違いない。またスコビーが悔い改めを拒否したことから、ランク神父はスコビーが大罪を犯したままの状態ですべての聖体拝領を受けたことも当然気が付いている。ランク神父は、スコビーが神に対する罪悪感のために自殺したと考えたはずで、それだからこそスコビーは神を愛していたと発言できる。しかしスコビーがルイズとヘレンのためにも死んだことをランク神父が理解しているのかどうかは判断ができない。ランク神父がルイズの発言に対して示した同意は、ルイズのためを思っていることなのか、それとも本当にそう思っているのかは謎である。

## VIII 結び

スコビーは、神をあわれみ神のために自殺をするという結末に向けて周到に作られた人物

で、作品の冒頭からその結末を予測できるような特徴を示している。スコビーは「あわれみ」と「責任感」がきわめて強く、結婚の際に胸のなかで誓った妻を幸せにするという「誓い」の重みと、実際には幸せにできなかった事実が、現在のスコビーに重くのしかかっている。人生に対する受け身の生き方も、強い「責任感」のために自らには「挫折感」と「絶望」と、ルイズに対しては「罪悪感」と「あわれみ」を感じているからである。さらに過去に苦しむ様子は、語り手がほとんどスコビーの過去について語らないという語りにより推測できる。同時にスコビーの「あわれみ」は相手を上から見下ろす感情で、相手の人生をどうにかできるというエゴイズムを持っていた。しかしスコビーは自らのエゴイズムに気が付くことがなかったので、誤解と判断ミスにつながった。スコビーの「責任感」「あわれみ」、それにエゴイズムと誤解や判断ミスというパターンは、少女の死の場面を経てヘレンとの関係、最終的には神との関係に引き継がれ、その深刻さを深めて行く。つまりスコビーは少女の死を経て過去と向き合い、ヘレンとの情事を通して「あわれみ」と「責任感」のスケールと対象を広げて行った。しかし同時にエゴイズムも大きくなり、誤解や判断ミスは以前と同じように繰り返されている。そしてスコビーの「あわれみ」と「責任感」における愛とエゴイズムは、ルイズとヘレンと神のための自殺において、それぞれの頂点に達している。

この作品に対するオーウェルやウォーなどの批判は、グリーンの宗教観に対してのものである。神の無限の「慈悲」を信じる作者がスコビーを通して探ったのは、教会の外にある救済の可能性である。そして教会の救いの枠からはみ出たスコビーに対して、作者は「救い」と「聖性」の暗示を与えている。作者はカトリックにおいてオーウェルやウォーと立ち位置が違い、正統なカトリックの文学者の立場から言えば、彼らがグリーンにかみついたのも当然のことなのだ。

しかし作者はスコビーを誰の目にも明らかなヒーローにはしなかった。スコビーがヒーローでないのかそれとも「真の悲劇的ヒーロー」<sup>20)</sup>なのか、この作品が「残酷悲劇」(XV)なのか純粋な「悲劇」なのかの判断は難しい。スコビーの「あわれみ」と「責任感」に含まれる愛とエゴイズムは、スコビーがスケールアップするにつれて、両者ともに拡大されていくからだ。作者は作品の最後でスコビーに「救い」の暗示を与えるだけでなく、スコビーの死後は彼に「聖性」の暗示を与えることにより、スコビーに「聖人」のイメージを付与している。しかしスコビーを「聖人」とは決めがたい。なぜならスコビーは汚職にかかわり、エゴイズムを悔いることなく自殺を遂げた点においては、刑法上も宗教上も「罪人」であるからだ。しかしスコビーを「悪人」とも決めがたい。スコビーは自己の「心の平和」を犠牲にし、スコビー独自の愛し方でルイズとヘレンと神を愛した。つまりどちらの側面を重視するかにより、この作品は作者が言うように「残酷悲劇」(XV)にもなりうるし、スコビーは「真の悲劇的ヒーロー」にもなりうる。その点でこの作品は「喜劇と悲劇の境目」<sup>21)</sup>に位置

するとの考え方は正しい。

実はこの「喜劇と悲劇の境目」こそが作者のねらいめである。作者はこの作品のエピグラフに、レオン・ブロイの「罪人はキリスト教の中心にいる…罪人ほどキリスト教において有能な者はいない、聖者をのぞいては」という一節を引いている。作者にとって「罪人と聖人は合致しうるのだ。そこには決して不連続、断絶はない」<sup>22)</sup>のである。スコビーは自らを重要な規律違反をするチャンスもないような「軍隊の一兵隊」(129)、あるいはキリストの処刑の場にいた「傍観者の一人」(175)と考えていたが、ヘレンとの情事を通して自らが「罪人」であると意識し始め、そして最終的にはカトリック教会の教義では救済されない墮地獄の「悪人」となった。しかし逆説的に言えばスコビーの墮地獄は神への愛の表明である。なぜならスコビーの論理では、神を守るには自分の墮地獄しかないからである。すると地獄落ちできたことでスコビーはヒーローなのである。作者はヘンリー・ジェームスに関するエッセイのなかに、T. S. エリオットの「ボードレール論」の次の部分を引用している。

なるほど人間の栄光は、救いを受ける能力であるが、人間の栄光が地獄落ちの能力であることも確かである。われわれの知る悪人について言える最悪のことは、政治家から泥棒にいたるまで彼らが地獄落ちできるほどの人間でないことだ。<sup>23)</sup>

逆説的な言い方ではあるが、小市民的だったスコビーが、すさまじいエゴイズムで神をもあわれむことができ、自らは慈悲を請うことなく滅びたから偉大なのである。地獄に墮ちる能力を持ち、神と二人の女性を守るために、墮地獄を信じて死んでいったスコビーは、作者が神の無限の「慈悲」を主張するためにも、作者にとってまことに都合のよい人物であった。

注

- 16 マリ＝フランソワーズ・アラン、三輪秀彦訳『グレアム・グリーン語る』（東京：早川書房、1983）、p. 248.
- 17 Graham Greene, Martin Shuttleworth & Simon Raven, “The Art of Fiction: Graham Greene,” Henry J. Donaghy (ed.), *Conversations with Graham Greene* (Jackson: University Press of Mississippi, 1992), p. 38.
- 18 Graham Greene, “The Virtue of Disloyalty,” Philip Stratford (ed.), *The Portable Graham Greene* (New York: Penguin Books, 1994), p. 526.
- 19 A. A. DeVitis, p. 92.
- 20 *Ibid.*, p. 92.
- 21 Richard Kelley, *Graham Greene* (New York: Frederick Ungar Publishing Co., 1984), p. 59.
- 22 アラン、pp. 251-2.
- 23 T. S. Eliot, “Baudelaire,” *Selected Essays* (London: Faber and Faber, 1951), p. 429.

(たまい・ひさし 外国語学部教授)